

Harry Potter and the Philosopher's Stone

のアメリカ英語版

——その意義と必要性について——

野原 康弘

はじめに

2005年7月18日、月曜日。オックスフォードからロンドンのパディントン駅に向かう通勤列車の中。いつもは座席のテーブルに新聞を広げたり、ラップトップの画面とキーボードに夢中になっているビジネスマンやビジネスウーマンたち。駅で買ったコーヒーを飲みながらなにげない会話を楽しんだりしている一般の乗客たち。しかし、その朝はいつもとまったく違っていた。異様なほどに静かな車内。ほとんどの乗客が読書に集中している。

パディントン駅で地下鉄に乗り換えて、ピカデリー・サーカスへ向かう。出遭ったのはまたまた同じ光景。電車より混雑した地下鉄の車内で、しかもほんの一駅か二駅の間でも、しかも立ったままでも、片時もその本を離さない。地下鉄の騒音にかき消されながらも途切れ途切れに聴こえてくる言葉は‘Potter’や‘Harry’。

玄関先で「地図を読んでいる猫」を見て不安になり、街の通りで「派手なマントを着て浮かれている人々」に出会って面食らい、「真っ昼間から空を飛び交うふくろうたち」や「まるで集中豪雨のような流星群」のニュースに驚いている、気分はまさに「バーノンおじさん (Mr Vernon Dursley: Harry Potter のおじさん) 状態」。それほどまでにイギリス人の大人たちを夢中にさせている本、それは。

実は、その二日前、7月16日の土曜日に Harry Potter シリーズ、待望の

第6巻、*Harry Potter and the Half-Blood Prince* が発売された。第3巻の *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* 発売後から、急激に読者層を大人まで広げてしまい、そのあまりの人気に次巻の予約が殺到した。そのため第4巻の *Harry Potter and the Goblet of Fire* の発売の時には、予約できなかった人のために発売日の午前0時1分から店頭で売り出されるという異例の販売形態になった。第5巻、第6巻そして第7巻とも真夜中発売にもかかわらず、長蛇の列。何といっても並ぶのが大好きなイギリス人たちに新たな、しかもわくわくするような行列の機会を与え、それ以降、真夜中の店頭販売が恒例となった。

その日の乗客たちは、第6巻を何とか購入できたものの、週末、忙しくて読み終えることができなかった人たちであろう。何しろこの第6巻は607ページもあるため、イギリス人でもいっきに読み終えるのは大変だったはずである。

シリーズの中で最も長いのは第5巻 *Harry Potter and the Order of the Phoenix* の766ページで、読み終えるのに一番長くかかった記憶がある。

600ページほどの第6巻を読み終えるのにイギリス人が実際にはどれくらいかかるのか興味があり、友人の娘（現在、オックスフォード大学で医学を専攻している学生、当時、高校生）に尋ねたところ、土曜日を丸一日費やしてなんとか読み終えたとのことだった。

『ハリー・ポッターが英語で楽しく読める本』シリーズ（1巻から7巻）の著者、イギリス人の Belton 氏は、第7巻の *Harry Potter and the Deathly Hallows*（6巻とまったく同じ607ページ）を読み終えるのに18時間かかったと述べている（Belton⁴, p. 261）。「もちろん、本当はずっと早く読めただろうが一語一語かみしめて読んだため」と釈明はしているけれども。

子供向けの本？ とんでもない！

確かに、第1巻は純粹に子供のために書かれたものであり、表紙のイラストもそれを伺わせるようなもので、どうみても大人の購買意欲をそそるよう

なものではなかった。

筆者も第1巻が発売された1997年にはオックスフォードに滞在し、研究生を送っていた。毎日のように立ち寄っていた Blackwell の店頭でこれ見よがしに積まれている Harry Potter を目にはしていたし、飛ぶように売れていることも知っていたが、「所詮、子供の本」と手に取ってみることもなかった。

イギリス人の友人から、「子供が夢中になっているから読んでみないか」と Harry Potter を手渡されていなければ、読み終えた後、少し恥ずかしい思いをしながら、自ら店頭で購入することもなかったはずである。

実際に読んでみると、表面的な言い方をすれば、第1巻（第2巻もほぼ同じ）は内容も子供たちが十分に理解できるものであるし、全体のページ数も223で、小学生高学年ぐらいなら十分読みこなせる分量である。

しかし、第3巻はこれまでの第1巻や第2巻より量が100ページ近くも増えたと同時に急に大人の読者が増え始めた。それは、「第3巻がきわめて権威のあるウィットブレッド賞の大人向けの作品部門で第2位に入った Cheetham, p. 19)」ことから分かるように、確実に大人の読者も楽しめる内容になってきたことを意味している。第3巻から読み始めた多くの大人たちは、その後、既刊の第1巻と第2巻を購入し、最初から読み始めるようになっていったようである。

その後も第4巻が大人向けの SF の賞としてもっとも有名なヒューゴ賞 (Hugo Award) を受賞したり、第5巻は、大人向けの書物に与えられる権威ある賞、**W・H・Smith** 賞を獲得している (Ibid., p. 21) 点からみても、第3巻以降、語彙も内容も大人が読んでもおかしくない、というより大人にも十分読み応えのある構想になってきている。

先述の Belton 氏も、実際に購入して読み始めたのは第4巻からで、「それまでは児童書として宣伝されており、当時40代半ばだったわたしは、児童書などとうの昔に卒業したと思っていた」と述べている。その氏が「子供向けの本にハマってしまった」のである (Belton¹, pp. 15-16)。Belton 氏は「子

供向けの本」と書いているが、第4巻は大人の本といっても過言ではない。むしろ、子供たちにこの第4巻の真意が理解できているのか筆者には多に疑問である。表面的には読み通せても。

もちろん、大人の中には、つまらないと言う人たちもいる。「れっきとした大人が」と言われたこともある。Harry Potter シリーズの文学的価値を語るのに肩身の狭い思いをしていたときに、オックスフォードでも名門語学学校、Swan School の校長先生の家へ招待される機会があった。彼女はこのHarry Potter シリーズをお孫さんのために読み聞かせていたそうだが、お孫さんはもちろんだが、彼女自身も Harry Potter にどっぷりとハマってしまったというのだ。「つまらない」とか「子供っぽい」という大人もたくさんいるけど、その人たちのほとんどが最後までちゃんと読み終えていないか、あまり教養のない人たちでしょうね。だってラテン語は頻繁に出てくる（確かに呪文や人名によく使用されている）し、文字を並べ替えて別の語を作る「アナグラム (Anagram)」も時々見られるでしょう。闇の帝王の本名 Tom Marbolo Riddle から Lord Voldemort を作り出す (I am Lord Voldemort は Tom Marbolo Riddle のアナグラムになっている) なんて、よく考えられているでしょう。イギリスの伝統小説の良さも十分つまっていますからね」と。彼女は Jane Austen の小説に触れながら、Harry Potter の素晴らしさを力説していた。

しかし、第2巻 *Harry Potter and the Chamber of Secrets* は、第1巻とは違っていた。一晩かかってでも読み終えてしまいたいと思った第1巻。第2巻にはそれほどの衝撃的な面白さは感じられなかった。

それでも、今、第2巻をもう一度読み直してみると、後のシリーズに繋がるための必要不可欠な要素が随所に織り込められていてそれなりに熟考された構想をしているのだが、第1巻の衝撃が大きすぎただけに、第2巻がかすんでしまった印象を受けただけだったのかも知れないと今では深く反省している。

とにかく、ダーズリー家の人々が Harry をいじめるそのやり方は、昔、

読んだ Doald Dahl の *James and the Giant Peach* を思い出させる。

第3巻で、Harry の両親の親友であったにもかかわらず、その両親を死に至らしめた裏切り者 Pettigrew を、周りの反対を押し切って Harry が許してやる場面は、Shakespeare の *Tempest* で、自分を裏切りミラノ大公の座を篡奪した弟のアントーニオを最後には許してやる「プロスペローの寛大さ」を思い出させたほどである。

世界中の人々を一瞬のうちに虜にしてしまった Harry Potter。この異様ともいえるほどの人気に目をつけたアメリカ合衆国の出版社もあった。アメリカ中でもオリジナル版が出回っている中、いわゆる「アメリカ英語版」を新たに出版しようという決断をしたのである。

「アメリカ英語版」の一般的な評判は？

Harry Potter の第1巻 *Harry Potter and the Philosopher's Stone* は、1997年6月に、ロンドンにある Bloomsbury という出版社から発売されて、その人気は全世界に広まっていった。

翌年の1998年9月に、アメリカの読者のために、アメリカ英語に「翻訳」されたアメリカ英語版が、Scholastic（日本でも英語学習の教材などを出版している）というアメリカの出版社から発売され、長い間、いろいろ物議を醸し出したことをご存知の方も多いと思う。

特に、2000年7月10日の *The New York Times* に掲載された記事“Harry Potter, Minus a Certain Flavour”は、アメリカ英語版に痛烈な非難を浴びせ、アメリカ人読者の気持ちを率直に代弁し、大きな共感を得たことは間違いない。この記事を書いた Peter H. Gleick 氏は、本のタイトルが '*Harry Potter and the Philosopher's Stone*' から '*Harry Potter and the Sorcerer's Stone*' に変更されてしまったことへの不満をこの記事であらわにした。

さらに、書き換えられたのはタイトルだけではなく、当然といえば当然だが、語彙やスペリングもアメリカ英語に書き換えられてしまい、その結果、アメリカ英語版 Harry Potter はこのファンタジーが持つ「魔法社会の雰囲

気」や「イギリスらしい独特の趣き」をまったく失ってしまったと辛辣に批判している。アメリカの新聞でありながら、この記事のタイトルに‘Flavor’ではなくて、イギリス英語のスペリング‘Flavour’をわざわざ使用している点からみても、この記事の作者の皮肉を十分読み取ることができる。

この Gleick 氏の子供たちは、イギリス英語のオリジナル版を非常に楽しんで読みこなしているし、ロンドンから送られてくる次巻のオリジナル版を楽しみに待っていることも併記されてあった。

この記事为契机にインターネット上ではますますいろんな意見が飛び交った。その中の一つを引用してみる。

Many felt that the translation insulted the intelligence of the American public.

多くのアメリカ人たちは、アメリカの子供たちがイギリス英語とはいえ、オリジナルを読みこなせないと侮辱されたような腹立たしさをこのアメリカ英語版に抱いていたのである。インターネット上での引用は以下のように続いている。

In their editions of the sequels, Scholastic did not Americanize the text as much and did not change the titles.

このようにシリーズ第1巻アメリカ英語版は大いに非難され、不評であった。それを受けてか、第2巻以降は、出版社 Scholastic もアメリカ英語への変更を大いに自粛しているようであるが、それでも語彙などはアメリカ英語をあくまで使用し続けている。

例えば、シリーズ第3巻 *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* で、オリジナル版ではハイフンで表記されている light-blue (p.288) がアメリカ英語版では2語の light blue (p.293) となっていたり、オリジナル版ではハイフ

ン語の hour-glass (p. 288) がアメリカ英語版では hourglass (p. 293) のように、1 語で表記されている。このようにアメリカ英語への変更も大いに縮小され、内容を変えない細かな違いに限定されてきているように思われる。

しかし、イギリス英語とアメリカ英語の違いに興味を持つ筆者にとって、この全くもって不評の *Harry Potter and the Sorcerer's Stone* も、オリジナル版のイギリス英語をどのようなアメリカ英語に置き換えているのかを具体的に調べるには最適の資料である。置き換えられた例のいくつかは、上記の記事 “Harry Potter, Minus a Certain Flavour” の中にも挙げられているが、ここでは両方の本を丁寧に読み比べながら、違いを抜き出し、なぜ置き換えられたのか、置き換えは必要だったのかなどを考察してみたいと思う。

もう一つ、過去においてイギリスの小説をアメリカ英語に直したり、あるいはその逆でアメリカの小説をイギリス英語に置き換えたケースなどにも触れてみたいと考えている。

書名の違い

まず、アメリカ英語版のタイトル *Harry Potter and the Sorcerer's Stone* で使用された sorcerer という語について調べてみると、アメリカで出版されている辞書 *The Random House Dictionary of the English* はその語を以下のように定義している。

A person who is supposed to exercise supernatural powers through the aid of evil spirits; black magicians; wizard.

—*The Random House Dictionary of the English* (p. 1358)

一方、philosopher の定義をイギリスの辞書、*The Oxford English Dictionary* で参照すると以下の通りである。

An adept in occult science, as an alchemist, magician, diviner of dreams,

weather-prophet, etc.

—*The Oxford English Dictionary* Vol. VII. (N-Poy p. 779)

さらに、この philosopher の定義を *The Random House Dictionary of the English* (p. 1082) で調べてみると、*The Oxford English Dictionary* に記載されていた magician という表記はされていない。ということは、アメリカ人は philosopher という語を「魔法使い」という意味では理解しがたいということである。そういう理由だけで sorcerer へ置き換えたのであれば、この変更も納得がいく。

確かに、「魔法使い」という意味だけをはっきりさせるには sorcerer を使用する方がアメリカ人だけでなくイギリス人にも分かりやすいのではないだろうか。

The Oxford English Dictionary で sorcerer を引いてみると

One who practices sorcery; a wizard, a magician.

—*The Oxford English Dictionary* (vol. X. Sole—Sz p. 440)

定義では「魔法使い」の表記が明確に示されている。

実際、オリジナル版でも単に「魔法使い」を意味する場合、philosopher ではなく sorcerer が使用されているところがある。

If he'd once defeated the greatest **sorcerer** in the world, how come Dudley had always been able to kick him around like a football? (p. 47)

さらに、Dumbledore 校長の肩書きのところでも sorcerer の省略形 Sorc. が使用されている。

Headmaster: Albus Dumbledore

(Order of Merlin, First Class, Grand **Sorc.**, Chf. Warlock,
Supreme Mugwump, International Confed. of Wizard) (p. 42)

しかし、ここで問題になるのは、オリジナル版のタイトルで使用されているのはあくまで、Philosopher's Stone という語句であって、Philosopher という単独の語ではないという点である。というのも、この語句 Philosopher's Stone は、Philosopher と Stone が結合しただけの単なる合成語句ではなく、以下に引用したように、「特別な意味」を持っている表現だからである。

A reputed solid substance or preparation supposed by the alchemists to possess the property of changing other metals into gold or silver, the discovery of which was the supreme object of alchemy. Being identified with the ELIXIR, it had also, according to some, the power of prolonging life indefinitely, and of curing all wounds and diseases.

—*The Oxford English Dictionary*. VII. p. 780.

そもそもこの Philosopher's Stone が英語の文献に初めて登場したのは、Geoffrey Chaucer の *The Canterbury Tales* (1386年) においてである (*Ibid.*, VII. p. 780)。

A! nay! lat be; the **philosophres stoon**,
Elixer clept, we sechen faste echoon;
For hadde we hym, thanne were we siker ynow.

いやいや、それは置いておくとして、

我々は 'Elixer (<Mod E Elixir)' と呼ばれる philosopher's stone を
ずっと探しているんだよ。

その石を手に入れたら、大丈夫なんだから。

—'The Canon's Yeoman's Prologue and Tale', ll. 862-864.

この物語は、主人の Canon が金属を金や銀に変える研究を行っているのを手助けしている Yeoman がその実態を暴露するもので、ギリシャやローマの時代からその研究がなされていたことがわかる。

この philosopher's stone という語句は、それ以来現在まで、その意味で変わることなく使用されており、アメリカ英語においても変わらないはずである。

実際、*The Random House Dictionary of the English* (p. 1082) でも以下のよう
に定義されており、イギリス英語とアメリカ英語の間で違いがあるとは思
われない。

An imaginary substance or preparation believed capable of transmuting
baser metals into gold or silver, and of prolonging life.

すなわち、オリジナル版のタイトルに使われている 'Philosopher's Stone'
は「賢者の石、化金石」と言われるもので、「卑金属を金や銀に変えたり、
人の寿命を延ばすことができると信じられている石」という意味の特別な石
のことである。

この物語の内容と関連付けて説明すると、この石は「Potter 一家を襲い、
幼子の Harry にかけて『死の呪文』が自分に跳ね返り、逆に身体を失った
状態に陥ってしまった魔法界の闇の帝王 Lord Voldemort。その彼が失った
身体と過去の権力を取り戻し、完全復活を遂げるためになんとしても手に入
れようとしている石」のことである。

第1巻の後半はこの石を巡り物語が展開していき、読み続けていくとその
ことが読者に少しずつ分かってくるという、この物語では不可欠であり、重
要な役割を果たしている石である。

従って、'Philosopher's Stone' がアメリカ英語版でのように 'Sorcerer's
Stone' と置き換えられた場合、本当に本来の意味を表現できるのか疑問が生
じる。というのも、前述の両方の辞書を調べてみても、'Sorcerer's Stone' と

いう句はどこにも見当たらない。このままでは「賢者の石」ではなく、単に「魔法使いの石」の意味になってしまう。

さらに、本文中において「卑金属を金や銀に変えたり、人の寿命を延ばすことができると信じられている石」を言及する箇所が出てくるが、アメリカ英語版はタイトルだけでなく、本文中でも ‘Sorcerer’s Stone’ という表現を使用しているので、アメリカ人の子供たちはその使用を誤解してしまう恐れさえある。

たとえアメリカ人の子供たちが ‘Philosopher’s Stone’ の真の意味を最初は理解できなかったとしても、物語を読み進めていくにつれて、その意味が次第にわかってくるはずである。良い物語というものはいろいろなことが少しずつ解き明かされていくように十分考えられて構想されているものである。

実際、この ‘Philosopher’s Stone’ のことも、物語が半ばをすぎたあたりで解き明かされていく。その石に関することをどこかで目にしたことがある（ということは、読者もどこかで読んでいるはずである。その時は読者も Harry と同じで、そのことにあまり注意を払っていなかったが）という Harry の記憶が蘇り、それをヒントに Hermione が古い本を見つけ出し、Ron がそれを読み上げるところが161ページに登場する。

The ancient study of alchemy is concerned with making *the Philosopher’s Stone*, a legendary substance with astonishing powers. The Stone will transform any metal into pure gold. It also produces the Elixir of Life, which will make the drinker immortal.

オリジナル版で、‘the Philosopher’s Stone’ について、このような説明がなされていることが分かっているにもかかわらず、アメリカ英語版が ‘the Sorcerer’s Stone’ に書き換えてしまったことはまったく愚かなことであるといわざるを得ない。

そもそも、このような魔法を扱ったファンタジーでは、謎めいた部分がい

ろいろあって、その謎が少しずつ解けていくところに面白みがあるわけで、そのようなプロットをまったく理解できていないアメリカの Scholastic 出版社（またはその社の編集者）のセンスの無さを露呈している。

アメリカ英語版はタイトルだけでなく、オリジナル版とは違った箇所がかなり存在する。その変更箇所を具体的に調べてみよう。まずは、スペリングから。

スペリングの違い

イギリス英語とアメリカ英語はスペリングにおいて、大きな違いが存在することはよく知られている。アメリカ英語版でも、すでに一般的に定着していると考えられるものはすべてアメリカ英語のスペリングに書き直されている。

オリジナル版	アメリカ英語版
1) aero- : air- aeroplane (p. 21)	airplane (p. 22)
2) -ey : -ay grey (p. 7) greyish (p. 31)	gray (p. 2) grayish (p. 35)
3) -ll : -l cancelled (p. 32)	canceled (p. 37)
4) -mme : -m programme (p. 32)	program (p. 37)
5) OK : okay	

It's OK! (p. 201)

It's okay. (p. 277)

この語はスペリングだけでなく語彙の問題でもある。本来、イギリス英語では OK ではなく、all right が一般的なはずである。しかし最近では、若い人たちは特に OK を好む傾向があるように思われる。恐らくイギリスで大人気となっているアメリカ製作 TV 番組（例えば、'Friends' や 'Lost' など）の影響が考えられる。

6) **-ou** : **-o**

armour (p. 152)

armor (p. 206)

colour-coding (p. 167)

color-coding (p. 228)

favourite (p. 24)

favorite (p. 25)

flavour (p. 93)

flavor (p. 125)

honour (p. 86)

honor (p. 114)

neighbours (p. 7)

neighbors (p. 1)

rumours (p. 14)

rumors (p. 11)

vapour (p. 213)

vapor (p. 293)

7) **-ou** : **-u**

moustache (p. 7)

mustache (p. 1)

8) **-ough** : **-ow**

ploughed (p. 36)

plowed (p. 43)

9) **-re** : **-er**

centre (p. 91)

center (p. 122)

10) **-re** : **-r**

furore (p. 218)

furor (p. 248)

- 11) **-se** : **-ce**
 practise (p. 125) practice (p. 170)
- 12) **-se** : **-ze**
 realize (p. 8) realize (p. 2)
 recognize (p. 152) recognize (p. 206)
- 13) **-u** : **-e**
 Hullo (p. 70) Hello (p. 93)
- 14) **-u** : **-o**
 Mum (p. 72) Mom (p. 95)
 mummy (p. 172) mommy (p. 235)
- 15) **-wards** : **-ward**
 afterwards (p. 25) afterward (p. 27)
 backwards (p. 157) backward (p. 256)
 forwards (p. 223) forward (p. 308)
 towards (p. 13) toward (p. 9)
- 16) **-y** : **-a**
 pyjamas (p. 97) pajamas (p. 130)

その他に、オリジナル版で、53ページに出てくる「大鍋」のスベリングは **cauldron**。「大鍋」は、アメリカ英語では通常 **caldrion** というスベリングが普通であるが、このアメリカ英語版では (p. 68)、イギリス英語のスベリングがそのまま使用されている。

それから、15) **-wards** と **-ward** に関して言えば、アメリカ英語の場合、

そのすべての品詞（副詞，形容詞，前置詞）において -ward だけを使用している。一方，イギリス英語では，副詞と前置詞においては，-wards が使用され，形容詞の場合のみ -ward が使用されている。

People jostled them as they moved **forwards** towards the gateway back to the Muggle world. (p. 223)：副詞としての使用

Army roadblocks prevented any further **forward** movement. (*Longman Dictionary of Contemporary English*, p. 636)：形容詞としての使用

Cf. The third task's really **straightforward**.

—*Harry Potter and the Goblet of Fire* (p. 478)

イギリス英語における基本的な使用は上記の例にみる通りであるが，オリジナル版で副詞であるにもかかわらず forward を使用している箇所もある。

He leant forward and grasped the bloom tightly in both hands and it shot towards Malfoy like a javelin. (p. 111)

こうして改めて見てくると，スペリングに関しては，イギリス英語よりアメリカ英語の方が実際の発音に合わせようとした改良綴字になっている。アメリカにおいて，このアメリカ式スペリングが完全に定着していることを十分感じさせる。これは，アメリカ中の印刷屋を訪れ，アメリカ式スペリングの徹底をお願いして回り，「アメリカの綴字法，文法，発音法の確立」のためにその生涯を捧げたノア・ウェブスター（Noah Webster: lexicographer: 1758～1843）のお陰である（*The Story of English*: pp. 240-242）と言える。

語彙の違い

ところで，まったく同一のものや概念を表すのに，イギリス英語とアメリカ英語で表現する語（句）が全く違う場合がある。読者に異なった概念を与

えたり、誤解を生じさせたりするときに限り、アメリカ英語版での語彙の置き換えは当然必要となるであろう。例えば、オリジナル版150ページに登場する tea という語。普通の「お茶」だけの意味ならそのままが良いが、ここでのこの tea はイギリスでは特別の意味を持つ tea なので、アメリカ英語版で置き換えられているのは正しい判断である。

tea (p. 150)

meal (p. 204)

この tea という語は普通の tea (「お茶」)とは違い、イギリス独特の習慣を意味するもので、「普通、3時から5時の間に紅茶と共にサンドイッチ、ケーキ、ビスケットなどが出される軽食」のこと。お茶だけが出されるわけではないから、meal としたのは悪くないが、むしろ、light meal か snack に直した方が、オリジナルの意味に近くなるように思われる。

一方、次の例はどうであろうか。

Harry made a sharp about turn and held the broom steady. (p. 111)

アメリカ英語版は下線部の turn を face に置き換えている。

Harry made a sharp about-face and held the broom steady. (p. 149)

もちろん、この置き換えで、悪くはない。というのも、アメリカ英語で「180度方向を変える」の意味では、make an about-face が一般的であるからである。

しかし、本当に置き換える必要があったのであろうか。この程度の置き換えなら、オリジナル版の turn のままでも意味は十分に推測できたのではないだろうか。

両版を詳しく比較していくと、果たして置き換えが必要だったのかと疑問に思われる箇所が多く出てくる。

以下に示したものは、オリジナル版での表現（左側）がアメリカ英語版では右側のような表現に置き換えられている具体的な例のリストである。置き換えなくても十分推測し、理解できる語（句）がほとんどように思われる。

a) 置き換える必要がないもの

オリジナル版	アメリカ英語版
about turn (p. 111)	about-face (p. 149)
bins (p. 24)	trash cans (p. 25)
beetroot (p. 24)	beet (p. 25)
bobbles (p. 23)	puff ball (p. 24)
bobble hats (p. 19)	bonnets (p. 18)
car park (p. 8)	parking lot (p. 3)
car park (p. 36)	parking garage (p. 43)
changing rooms (p. 136)	locker room (p. 184)
chips (p. 70)	fries (p. 123)
cinema (p. 22)	movies (p. 22)
cooker (p. 19)	stove (p. 19)
crackers (p. 149)	party favors (p. 203)
crisp packets (p. 40)	chip bags (p. 48)
(the) divide (p. 70)	(the) dividing barrier (p. 92)
dressing-gowns (p. 115)	bathrobes (p. 155)
driving them mad (p. 17)	driving them nuts (p. 234)
dustbin lids (p. 16)	trash can lids (p. 14)
football (p. 138)	soccer (p. 188)
for a fortnight (p. 146)	for two weeks (p. 198)
fringe (p. 23)	bangs (p. 24)

glove puppet (p. 23)	hand puppet (p. 24)
grow-your -own-warts kit (p. 150)	Grow-Your-Own Warts kit (p.204)
gummy walnut (p. 54)	toothless walnut (p. 68)
ice lolly (p. 24)	ice pop (p. 25)
had got (p. 91)	had gotten (p. 123)
hamburger bars (p. 22)	hamburger restaurant (p. 22)
humbugs (p. 92)	peppermints (p. 123)
Jacket potato (p. 127)	baked potato (p. 172)
jelly (p. 93)	Jell-O (p. 125)
lessons (p. 99)	classes (p. 133)
letter-box (p. 29)	mail slot (p. 33)
lookout (p. 182)	problem (p. 249)
lot (p. 9)	bunch (p. 4)
lot (p. 11)	crowd (p. 7)
lot (p. 169)	kind (p. 231)
mad (p. 167)	crazy (p. 229)
mint humbugs (p. 92)	peppermint humbugs (p. 123)
motorbike (p. 16)	motorcycle (p. 14)
motorway (p. 35)	highway (p. 41)
multi-storey (p. 36)	multilevel (p. 43)
Philosopher's Stone (p. 161)	Sorcerer's Stone (p. 219)
pitch (p. 123)	field (p. 166)
post (p. 29)	mail (p. 33)
punch-bag (p. 20)	punching bag (p. 20)
queuing (p. 98)	lining up (p. 131)
revising (p. 167)	studying (p. 229)
revision (p. 179)	studying (p. 245)
revision timetables (p. 167)	study schedules (p. 228)

rucksack (p. 70)	backpack (p. 92)
Sellotape (p. 20)	Scotch tape (p. 20)
Sellotaped (p. 22)	taped (p. 24)
Set Books (p. 52)	Course Book (p. 66)
sherbet lemon (p. 13)	lemon drop (p. 10)
short-sighted (p. 156)	nearsighted (p. 213)
sweet-shop (p. 214)	candy shop (p. 296)
taking the register (p. 101)	taking the roll call (p. 136)
This wants (p. 204)	This needs (p. 282)
They had drawn (p. 221)	They had tied (p. 306)
ticket box (p. 70)	barrier (p. 95)
toilet (p. 34)	bathroom (p. 40)
towards (p. 13)	toward (p. 9)
video recorder (p. 21)	VCR (p. 22)
trolley (p. 68)	cart (p. 90)
waste-paper (p. 98)	wastepaper (p. 132)
who was holidaying (p. 30)	who was vacationing (p. 34)
writing (p. 182)	copying (p. 250)

ここでは語（句）だけを掲載した関係上、それだけを見ていると置き換えの方が良いと思われるかも知れない。しかし、本文中では前後の文脈からその意味するものを楽に推測できるものがほとんどである。

それでも前述の tea のように置き換えが好ましい場合もある。以下はその例と解説である。

b) 置き換えられて良かったもの

オリジナル版

comprehensive (p. 28)

アメリカ英語版

public school (p. 32)

ここでの ‘comprehensive’ もアメリカ英語の辞書には「学校」に関するものは掲載されていないけれども、前後の文脈から Harry が9月から通う学校のことであることはわかる。

When September came he would be going off to secondary school and, for the first time in his life, he wouldn't be with Dudley. Dudley had a place at Uncle Vernon's old school, Smeltings. Piers Polkiss was going there, too. Harry, on the other hand, was going to Stonewall High, the local comprehensive. (p. 28)

イギリスの学校制度は義務教育の場合、三つのタイプ (public school [私学], grammar school [公立], comprehensive school [公立]) があり、アメリカの学校制度と大きく違うため、comprehensive がどのタイプの学校かを理解するのは困難なので、書き換えも認められる語である。

roundabout (p. 19)

carousel (p. 18)

この語は交通関係で使われる道路上での roundabout (環状交差路) ではなく、ここでは merry-go-round (回転木馬) の意味であるから、アメリカ英語で一般的な carousel に書き換える必要があったと思われる。

tea (p. 150)

meal (p. 204)

この tea と meal に関しては、既に解説している。

全体的にみて、アメリカ英語に置き換えられて良かったと思われるものは極端に少いことがわかる。

しかし、置き換えたことによって、オリジナルの意図するものと異なってしまったものも生じた。

c) 置き換えるべきではなかったもの

これは非常に重要で、中には置き換えたことでかえって分かりづらくなったり、あるいは全く異なったイメージを与えてしまったものもある。

crumpets

crumpets (p. 146)

English muffins (p. 199)

crumpets はお茶と一緒に出され、バターなどを塗る「平たいもの」であるのに対して、muffin は普通、「少し円柱形に近い」形をしたもの。やはり、形も食感も味もまったく違うものに直してしまったのはどうであろうか。

d) 全体から考慮すべきだったもの

一見、置き換えた方がよかったように思われるが、最後まで読んで全体から置き換えを考えるべきだったものもある。

jumper

jumper (p. 23)

sweater (p. 24)

次の引用文で下線が引かれた語 **jumper** は「イギリス英語とアメリカ英語の語彙の違い」を論じる場合必ず登場する語の一つである。この語に関しては、普通だと当然置き換えに賛同するところである。

Another time, Aunt Petunia had been trying to force him into a revolting old jumper of Dudley's (brown with orange bobbles). (p. 23)

アメリカ英語版 (p. 24) ではこの jumper は当然のごとく sweater

という語に置き換えられている (p. 24)。アメリカ英語では jumper には, sweater の意味が無く, 別の衣服を意味するので置き換えは当然であるかのように思われる。しかし, 次の場合はどうだろうか。

‘My mum. I told her you didn’t expect any present and—oh, no,’ he groaned, ‘she’s made you a Weasley jumper.’ (p. 147)

もちろん, これだけであれば, jumper がアメリカ英語版で, sweater に置き換えられている (p. 200) のも頷ける。しかし, オリジナル版では, この jumper についての説明が続いている。

Harry had torn open the parcel to find a thick, hand-knitted sweater in emerald green and a large box of home-made fudge. (p. 147)

どんなに幼いアメリカの子供でも, このシリーズの本を普通に読みこなせるなら, jumper のすぐ後に, sweater が使われて追加の説明がなされていれば, jumper が sweater を意味することぐらい簡単に理解できるはずである。このように前後の文脈を考えずに, ただ機械的に置き換えるのには非常に問題があると思われる。

もう一つ, **lavatory**

lavatory seat (p. 214)

toilet seat (p. 296)

この「便座」という語に関して, オリジナル版の214ページでは lavatory が使用されているが, イギリス英語でも toilet という語は普通に使用されている。例えば, オリジナル版の73ページでは, Weasley 一家の母と子供の会話の中で, toilet という語が何度か出てくる。

‘Now, you two—this year, you behave yourselves. If I get one more

owl telling me you've—you've blown up a **toilet** or—'

'Blown up a **toilet**? We've never blown up a **toilet**.'

おそらく、同じ語を使用するという編集方針のためか、アメリカ英語版では、214ページに登場する lavatory も toilet に直されている。しかし、ここは Weasley 一家の誰かではなく、品格を備えた Dumbledore 校長が Harry に話しかけている場面である。

'... I believe your friends Misterys Fred and George Weasley were responsible for trying to send you a **lavatory seat**. No doubt they thought it would amuse you. ...'

hogwarts 校の学生である「フレッドとジョージ」を 'Misterys Fred and George Weasley' と呼んでいる Dumbledore 校長に敬意を払い、アメリカの出版社もここはそのまま、toilet よりも少々格式ばった語 lavatory をわざと残すべきだったと思う。この箇所を読んで、読者は当然、73ページの King's Cross 駅の the Platform Nine and Three-Quarters の場面、すなわち、双子の Fred と George が hogwarts 校に行きたがって泣き出した幼い妹 Ginny に冗談で、「hogwarts 校の便座を送ってやるよ」と言った箇所を思い出すのである。

'Don't, Ginny, we'll send you loads of owls.'

'We'll send you a Hogwarts **toilet seat**.'

'George!'

'Only joking, Mum.'

双子の学生 Fred と George の発話だから toilet seat が使用されているのであって、二人は King's Cross 駅でのその約束を実行しようとした

のである。ただし、相手は Ginny ではなくて Harry だったわけだが。Fred と George だから toilet であり、Dumbledore 校長だから lavatory である。このような面白みをアメリカ英語版は機械的に置き換えて、何の意味も持たないものにしてしまった。

複合語についても、イギリス英語とアメリカ英語の違いが見られる。

複 合 語

語と語の結合（2語以上）で生じた複合語には以下の3種類がある。

- 1) 2語複合語：2語（以上）になる複合語
例：tax man/folk tale
- 2) 1語複合語：2語（以上）が完全に結合して1語になった複合語
例：taxman/folktale
- 3) ハイフン複合語：2語（以上）がハイフンでつながれた複合語
例：tax-man/folk-tale

上記の例 tax man/taxman/tax-man は、Quirk (pp.1057-1058) から、folk tale/folktale/folk-tale は Terban (p.54) から例証したものである。複合語は上記のいずれかの型で表記されるが、「税務署員」や「民話」を意味するこれらの複合語は3通りの型を持つ非常に珍しい例である。

もちろん、まれに2語以上が結合した3語複合語や4語複合語もあるが、数は少ないのでここではこの3つの型を中心に言及する。

複合語の表記に関して、問題になるのは、「ハイフン語の使用について——歴史的考察と今後の動向 その1——」（筆者の論文）でも述べていることだが、一般的にイギリス英語とアメリカ英語で大きく違うことである。Harry Potter シリーズを比較しても、オリジナル版とアメリカ英語版ではかなり違っている。以下は第1巻だけの比較リストである。

a) イギリス英語がハイフン複合語でアメリカ英語が1語複合語の例：

オリジナル版	アメリカ英語版
blood-curdling (p. 151)	bloodcurdling (p. 206)
car-splitting (p. 151)	carsplitting (p. 206)
get-ups (p. 8)	getups (p. 3)
half-heartedly (p. 149)	halfheartedly (p. 202)
home-made (p. 147)	homemade (p. 200)
lamp-like (p. 99)	lamplike (p. 132)
lunch-time (p. 9)	lunchtime (p. 9)
mid-air (p. 96)	midair (p. 129)
multi-storey (p. 36)	multilevel (p. 43)
night-time (p. 116)	nighttime (p. 156)
non-magic (p.43)	nonmagic (p. 53)
non-stop (p. 140)	nonstop (p. 190)
passers-by (p. 10)	passersby (p. 5)
short-sighted (p. 156)	nearsighted (p. 213)
waste-paper (p. 98)	wastepaper (p. 132)
zig-zagging (p. 139)	zigzagging (p. 189)

b) イギリス英語がハイフン複合語でアメリカ英語が2語複合語

オリジナル版	アメリカ英語版
air-rifle (p. 32)	air rifle (p. 37)
cart-ride (p. 59)	cart ride (p. 76)
coat-hanger (p. 36)	coat hanger (p. 43)
deep-red (p. 97)	deep red (p. 130)
dinning-room (p. 36)	dining room (p.42)
dog-biscuits (p. 57)	dog biscuits (p. 74)
Dragon-breeding (p. 169)	Dragon breeding (p. 230)

glittery black beetle eyes (p. 62)	glittery-black beetle eyes (p. 81)
goodbye (p. 8)	good-bye (p. 2)
half life (p. 188)	half-life (p. 258)
“Half past eleven” (p. 115)	“Half -past eleven” (p. 155)
pearly white (p. 187)	pearly-white (p. 256)
pitch black (p. 151)	pitch-black (p. 205)
silver blue blood (p. 183)	silver-blue blood (p. 251)
time out (p. 139)	time-out (p. 189)
well known (p. 179)	well-known (p. 245)
wide awake (p. 151)	wide-awake (p. 205)

こうして、異なる表記の語を両者から拾いあげてみると、イギリス英語でハイフンを使用している例がかなり多いことが分かる。ここではイギリス英語もアメリカ英語もハイフン複合語である場合は、取り上げていないので、それらを含めるとイギリス英語ではハイフン使用が顕著に見られる。

さらに以下のようなケースもまれに見られる。

d) オリジナル版が 2 語複合語でアメリカ英語版が 1 語複合語

news reader (p. 10)	newsreader (p. 6)
fruit cake (p. 34)	fruitcake (p. 40)

e) オリジナル版で 1 語複合語が、アメリカ英語版では 2 語複合語を使用している語句もある。

goalposts (p. 175)	goal posts (p. 123)
hairnet (p. 175)	hair net (p. 240)

f) 両方とも同じ 2 語複合語のままの例も見られる。

staff room (p. 196)	staff room (p.269)
---------------------	--------------------

余談になるかも知れないが、この複合語が「形容詞的」に使用された場合、両者の表記に違いが生じている。第3巻の *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* に登場する staff room の例を示しておく。

the staff-room door (p. 100) the staffroom door (p. 152)

オリジナル版ではハイフン複合語に、アメリカ英語版では1語複合語になっている。

g) オリジナル版が3語ハイフン複合語とアメリカ英語版が4語複合語

steak-and-kidney pie (p. 113) steak and kidney pie (p. 152)

h) 両方とも4語のハイフン複合語

grow-your-own-warts kit (p. 150) Grow-Your-Own-Wart kit (p. 204)

Hut-on-the-Rock (p. 42) Hut-on-the-Rock (p. 51)

以上、オリジナル版（イギリス英語）とアメリカ英語版（アメリカ英語）における複合語の違いを取り上げてみたが、両者にはかなり大きな違いが存在することがわかる。ただ問題になるのは、複合語表記の明確な規範法則が全く確立していないことである。そのために、イギリス英語においても、アメリカ英語においても自由に複合語を表現できるため、統一の取れていない状態が現状である。

同じ語彙使用

イギリス英語とアメリカ英語において異なった語（句）で表現することがほぼ確立しているにもかかわらず、オリジナル版で使用された語（句）がアメリカ英語版でもそのまま使用されているケースがある。

1) 「郵便」

この「郵便」に関しては、表現される語の違いがよく知られている。しか

し、イギリス英語とアメリカ英語の違いが最初から統一がとれているとは思われない。すなわち、基本的には post と mail の違いであり、イギリス英語の postman や postbox は、アメリカ英語ではそれぞれ mailman や mailbox になるのが一般的である。

ところが、「郵便局」は両語とも post office であり、「郵便局長」も postmaster/postmistress であり、「ハガキ」も postcard と同一の語。

オリジナル版での post (pp. 29, 33) はアメリカ英語版では mail に直されているが、34ページの post は、アメリカ英語版でもそのままであり、統一が取れていない。さらに postman (p. 33) はアメリカ英語版でもそのまま使用され、mailman は使われていない。

2) 「缶詰の」

この場合、イギリス英語は tinned であり、アメリカ英語は canned となるのが一般的である。

They ate stale cornflakes and cold **tinned** tomatoes on toast for breakfast next day. (p. 36)

しかし、アメリカ英語版 (p. 42) でも、canned ではなく tinned がそのまま使用されている。

3) 「地下鉄」

両者の違いが最も典型的なもので、イギリス英語が underground または tube であるのに対して、アメリカ英語は subway であることはあまりにも有名である。しかし、アメリカ英語版 (p. 67) でもそのまま underground が使用されている。もちろん、ここではオリジナル版が下のよう、大文字で始まっているので固有名詞的な扱いがなされているためかもしれない。

He got stuck in the ticket barrio on the **Underground** and complained loudly that the seats were too small and the trains too slow. (p. 53)

4) 「書店」

これもその違いがよく引き合いに出される語である。イギリス英語は bookshop あるいは book shop。それに対してアメリカ英語は bookstore が一般的。このオリジナル版でも当然のことながらイギリス英語の book shop (p. 53) が使われているが、一方、アメリカ英語版 (p. 68) でも book shop がそのまま使用されている。

5) 「鉄道」

これも両者ではっきり違う語であるので、オリジナル版 (p. 58) での railway はアメリカ英語版 (p. 74) では当然 railroad に置き換えられていると期待して読んだが、オリジナル版の railway がそのまま使用されている。

6) 「アイスクリーム・パフェ」(または「チョコレート・パフェ」)

これに相当する語が24ページに登場し、オリジナル版では knickerbocker glory となっている。イギリス英語独特の表現だと思われるが、不思議なことにアメリカ英語版でもそのまま knickerbocker glory が使用されている。果たして、アメリカ人の子供たちはこのまま理解できるのであろうか。というのも辞書の定義は次のようになっている。

まずイギリスの辞書 (*A Supplement to OED* (vol. H-N, p. 528)) では：

knickerbocker glory: a quantity of ice cream served with other ingredients
in a tall glass

一方、アメリカ英語の辞書 (Webster) には、knickerbocker glory という語句の項目は存在せず、代わりにあるのは、Knickerbocker と knickerbockers だ

けである。

Knickerbocker: a descendant of the Dutch settlers of New York

knickerbockers: loose-fitting short trousers gathered in at the knees

Belton 氏はこの knickerbocker glory はアメリカでは ice-cream sundae に当たると説明している (p. 37)。

sundae: ice cream served with syrup poured over it, and often other toppings, as whipped cream, chopped nuts, or fruit

7) 「糖蜜」

イギリス英語では treacle が一般的で、オリジナル版 (p. 97) でもこの語が使用されている。アメリカ英語では molasses が普通に使われていると思っていたが、アメリカ英語版のこの箇所 (p. 130) を調べてみると、オリジナル版の treacle がそのまま使われている。書き換えられていないのは treacle tart と語句になったためかも知れない。

8) 「(旅行者の) 手荷物」

イギリス英語では普通 luggage が使用され、オリジナル版でも (p. 83) luggage が使用されている。一方、アメリカ英語では、baggage が一般的に使用されているが、このアメリカ英語版では、オリジナル版同様、luggage の方を使用している。

以上が珍しく同じ語句が使用された箇所である。次に、文法に関してその違いをみていくことにする。

文 法

1) 冠詞

オリジナル版では冠詞がないところに、アメリカ英語版では定冠詞が付加されている。

The month-old cine-camera was lying on top of a small, working tank Dudley had once driven over **next door's dog**; ... (p. 32)

アメリカ英語版では ... over **the** next neighbor's dog; (p. 37)。ここでは 'the' の追加だけでなく door's も neighbor's に置き換えられている。

Harry knew, when they wished him good luck outside the changing rooms **next afternoon**, that Ron and Hermione were wondering whether they'd ever see him alive again. (p. 162)

アメリカ英語版では ... **the** next afternoon, ... (p. 221) となっている。

一方、アメリカ英語版でも冠詞の付加なしにオリジナル版と同じような表記がされているものもある。

Perhaps people have been celebrating Bonfire Night early—it's not until **next week**, folks! (pp. 10-11)

アメリカ英語版でもそのまま : it's not until next week, folks! (p. 6)

次は hospital の例。

'Taking Dudley **to hospital**,' growled Uncle Vernon. (p. 68)

ここでもやはり、アメリカ英語版では定冠詞が挿入され、‘to **the** hospital’ となっている。

2) 過去分詞の違い

オリジナル版	アメリカ英語版
learnt (p. 10)	learned (p. 6)
span (p. 138)	spun (p. 188)

過去分詞に関しては、一般的に受け入れられているイギリス英語とアメリカ英語の語彙の違いである。

3) 関係代名詞の違い

..., and she had conjured them up a bright blue fire **which** could be carried around in a jam jar. (p. 138)

..., and she had conjured them up a bright blue fire **that** could be carried around in a jam jar. (p. 181)

オリジナル版である最初の文では *which* が使用されているが、アメリカ英語版ではこの関係代名詞が *that* に変換されている。もちろん *that* の使用でも構わないが、*that* に置き換えなければならない理由はない。*Which* のままでも十分である。あるいは好みの問題か。

4) 過去完了を過去形で

以下の二つの文を比較してみれば、わかることだが、オリジナル版で過去完了が使用されているが、アメリカ英語版では単純過去形である。

He **had found** what he was looking for in his inside pocket. (p. 12)

He **found** what he was looking for in his inside pocket. (p. 9)

このページを詳しく読んでみても、オリジナル版が完了形を使用している理由が不明である。その点では、アメリカ英語版の方が好ましく思われるが、次のように直す方がより適切なように思われる。

He **found** what he **had been looking** for in his inside pocket.

というのも、その6行ほどまえに、‘He was busy rummaging his cloak, looking for something.’ という文があるからである。

5) 引用符

会話文を示す引用符はイギリス英語でもアメリカ英語でも、一般的には「“ ”: ダブル引用符 (double quotes)」が普通である。しかし、イギリス英語ではまれに「‘ ’: シングル引用符 (single quotes)」が見られる。Harry Potter のこのシリーズでも Rowling 氏は、「シングル引用符」を好んでいる。例えば、オリジナル版の最初の会話文 (p. 9) は以下のようなものである。

‘The Potters, that’s right, that’s what I heard—’

‘—yes, their son, Harry—’

一方、アメリカ英語版 (p. 4) では、こちらも一貫して「ダブル引用符」が使われている。

“The Potters, that’s right, that’s what I heard—”

“—yes, their son, Harry—”

Rowling 氏も「ダブル引用符」を使用しているところがある。例えば、次の様に。

‘That’s what I said, but Dumbledore thinks that—what was it? — “**to the well-organised mind, death is but the next great adventure**”.’ (p. 218)

この場合、「ダブル引用符」で括られたところは、別の人（ここでは、Harry ではなく、Dumbledore 校長）が話したことをそっくりそのまま引用していることを示している。アメリカ英語版 (p. 302) では、オリジナル版で「ダブル引用符」で括られた箇所は、逆に「シングル引用符」で括られている。

「引用符」に関しては、作者の好みによるもので、一貫性さえ取れていたら、まったく問題にすることは無いと思われる。実際、第7巻の最後の会話文まで、オリジナル版は「シングル引用符」が、アメリカ英語版は「ダブル引用符」がそれぞれ一貫して使用されている。

‘I know he will.’

Harry Potter and the Deathly Hallows (p. 607) : オリジナル版

“I know he will.”

Harry Potter and the Deathly Hallows (p. 759) : アメリカ英語版

6) アメリカ英語で追加されたもの

a) ‘for’ の付加

オリジナル版では以下のように ‘set off home’ と表記されている箇所が、

He hurried to his car and **set off home**, ... (p. 10)

アメリカ英語版では太字の箇所は、‘for’ が追加され、‘set off **for** home’ (p. 5)

となっている。

b) ‘inside’ の付加

オリジナル版では以下のような表現が

These fantastic crackers were nothing like the feeble Muggle ones the Dursleys usually bought, **with their little plastic toys and their flimsy paper hats.** (p. 149)

アメリカ英語版では、文尾に ‘inside’ が付加され、‘with their little plastic toys and their flimsy paper hats **inside**’ (p. 203) となっている。

c) ‘out’ の付加

オリジナル版 (p. 160) には存在しなかった副詞の out が、アメリカ英語版では ‘choked’ の後に付加されて、以下のような文になっている。

‘There’s no need to tell me I’m not brave enough to be in Gryffindor, Malfoy’s already done that,’ Neville **choked out.** (p. 218)

d) ‘from’ の付加

オリジナル版での表記は以下の通り、‘stop+Object+～ing’ が使用されているが、

It’s hard to **stop Muggles noticing us** if we’re keeping dragons in the back garden—anyway, you can’t tame dragons, it’s dangerous. (p. 169)

アメリカ英語版では、‘stop Muggles **from** noticing us’ (p. 230) と from が追加されている。*Random House Dictionary of the English Language* でも、‘to

restrain, hinder, or prevent' の意味で、普通、from を伴うことが記載されている。

I couldn't stop him **from** going.

上記の例文がアメリカ英語では一般的で、イギリス英語の 'stop+Objects+~ing' の形は掲載されていない。

7) 削除されている箇所

アメリカ英語で語（句）が付加されている例を参照してきたが、逆にオリジナル版に存在していた語（句）がアメリカ英語版では削除されている箇所もある。

a) 'almost' の削除

オリジナル版とアメリカ英語版の文を並列してみる。

He passed Filch **almost** in the doorway; (p. 152)

He passed Filch in the door way; (p. 206)

'almost': ここで almost をわざわざ削除する意図が理解し難い。

b) 'Professor' の削除

ホグワーツに向かう列車の中で買った Chocolate Frogs の中には、有名な魔法使いや魔法の載ったカードが入っている。Harry が手にしたカードは Albus Dambledore 校長が載ったもので、カードの裏に、以下のように Dambledore 校長の略歴が書かれてあった。

Albus Dumbledore, currently Headmaster of Hogwarts.

Considered by many of the greatest wizard of modern times,
Professor Dumbledore is particularly famous for
his defeat of the dark wizard Grindelwald in 1945, ...
Nicolas Flamel. Professor Dumbledore enjoys
chamber music and tenpin bowling.

オリジナル版 (p. 77)

アメリカ英語版 (pp. 102-103) では、上記の Dumbledore 校長につけられている Professor という肩書きを削除している。

上の文章は、後々、Harry が Flamel を思い出す場面で再登場する。

‘I’ve found Flamel! I told you I’d read the name somewhere before, I read it on the train coming here—listen to this: “**Professor** Dumbledore is particularly famous for his defeat of the dark wizard Grindelwald in 1945, ...’

オリジナル版 (p. 160)

ここでもアメリカ英語版 (p. 219) は、同じように ‘Professor’ を省いている。しかし、これらは特に Dumbledore 校長の肩書きを説明する文章であるから、省略する必要性はなかったのではないだろうか。

Belton 氏 (Belton², p. 95) は、ホグワーツのほとんどの先生方が名前の前に Professor という敬称をつけて呼ばれているが、これはイギリスでも一般的ではないが、魔法界には大学がなくホグワーツ校が最高位の教育機関であるから、Professor という語を使用できると述べている。

実際、ホグワーツ校の他の先生方、例えば McGonagall 先生や Quirrell 先生の表記の仕方はアメリカ英語版でも、オリジナル版と同じで ‘Professor’ を使用している。両方の例を参考に一つずつ挙げてみるが、それ以外の先生方にも ‘Professor’ が付加されている。

Professor McGonagall sniffed angrily.

(オリジナル版 p. 13)

(アメリカ英語版 p. 10)

But the others wouldn't let **Professor** Quirrell keep Harry to himself.

(オリジナル版 p. 55)

(アメリカ英語版 p. 70)

このように部分的に付加されたり、削除されたりしたマイナーな変更の他に、アメリカ英語版で内容が大きく変更されている箇所もある。次はそれらを見ていくことにする。

8) 変更されたところ

まずはオリジナル版から数行を抜き出してみよう。

Then a pain pierced his head like he'd never felt before, it was as though his scar was on fire — half-blinded, he staggered backwards. He heard hooves behind him, galloping, and something jumped clean over him, charging at the figure. (p. 187)

下線部のところがアメリカ英語版では、ゴシックで示したように変更されている。

Then a pain **like he'd never felt before** pierced his head; it was as though his scar was on fire. **Half-blinded**, he staggered **backward**. He heard hooves behind him, galloping, and something jumped clean over **Harry**, charging at the figure. (P. 256)

最初の文において 'like he'd never felt before' という句が pain のすぐ後ろに位置することによって、オリジナルのあいまいさ（この句が pain にかか

るのか、head にかかるのか) が、アメリカ英語版ではなくなっている。

次の下線部 —half-blinded のところは、オリジナル版は3つの文を接続詞無しで繋いでいて、テンポが良いが、アメリカ英語版は、セミコロンで2つの文を繋ぎ、もう一つの文は独立させ、分詞構文を使った文にしている。

次の backwards と backward はスペリングの違いで述べている通りである。最後の下線部の代名詞 him より固有名詞 Harryの方がわかりやすい。

英語のなまり

Hagrid の英語

「ホグワーツ校の鍵と領地を守る番人」である Hagrid の英語は標準英語とかなり違って、独特のなまりを持っている。Belton¹ (pp. 146-151.) によると、「Hagrid のなまりはイギリス南西部、すなわち Somerset, Cornwall, Devon, Gloucestershire やその周辺のなまりに由来します」とある。このイギリス南西部のなまりをどのようなアメリカ英語に直すかは難しく、結局はオリジナル版そのままの形で記述されている。

Hagrid の発話を検討してみよう。

16ページ

‘**Borrowed** it, Professor Dumbledore, sir.’

主語 (ここでは ‘I’) の省略

‘No, sir—**house** was almost destroyed but I got him out all right before the Muggles started **swarmin’** around. He fell asleep as **we was flyin’** over Bristol.’

冠詞 (ここでは ‘the’) の省略

語尾 (ここでは ‘g’) を発音しない: swarmin’, flyin’

主語 (ここでは ‘we’) と be 動詞 (ここでは ‘was’) の不一致

39ページ

‘**Couldn’t** make us a cup **o’** tea, could **yeh**? It’s not been an easy journey ...’

主語 ('You') の省略

語尾 ('of' の '-f') を発音しない

'you' を 'yeh' と発音する

'An' here's Harry,'

'And' の '-d' を発音しない

Las' time I saw you, **you was** only a baby,'

'Last' の '-t' を発音しない

主語 (you) と be 動詞 (was) の不一致

Yeh look a lot like **yer** dad, but **yeh've** got **yer** mum's eyes.'

'your' を 'yer' と発音する

40ページ

'Anyway—Harry,' ... 'a very happy birthday to **yeh. Got** summat **fer yeh** here—I **migha** sat on it at some point, but it'll taste all right.'

'for' を 'fer' と発音する

2語 'might have' を1語にして発音する

この他に、138頁には 'oughta=ought to' や 'coulda=could have' も登場。

'True, I haven't introduced **meself**.

'my' を 'me' とするので、'myself' も 'meself' になる

42ページ

'Ah, **go boil yer** heads, both of **yeh,**'

'go and boil' の 'and' を省略する

45ページ

'... they were too close **ter** Dumbledore **ter** want **anythin' ter** do with the Dark Side.'

'to' を 'ter' と発音する

'... maybe he just wanted **'em outta** the way.'

'them' を ''em' と発音する

‘out of’ を ‘outta’ と発音する

Hagrid が発話した文はアメリカ英語でも基本的にそのままの形であるが、直されているところが一箇所ある。

‘Young Sirius Black **lent it me.** I’ve got him, sir.’

オリジナル版 (p. 16)

オリジナル版での太字の部分が、アメリカ英語版では下線部のように直されている。

“Young Sirius Black lent it to me. I’ve got him, sir.”

アメリカ英語版 (p. 14)

この例以外は、Hagrid の発音の表記の仕方や語の省略の問題であったが、この例は非文法的であるので、文法的に直されたと考えられる。

Harry Potter シリーズには Hagrid の英語以外にさまざまな変種の英語が登場する。第2巻では House Elf, Dobby の英語、第3巻では Knight Bus の運転手 Ernie Prang と、車掌 Stan Shunpike の「コクニー訛りの英語」、さらに第4巻では「魔法校3校対抗試合」に出場するためにホグワーツ校を訪問した Fleur Delacour の「フランス語訛りの英語」と同じく出場者 Viktor Krum の「ブルガリア訛り（ドイツ語の訛りに近い）の英語」が登場している。しかし、ここでは紙面の都合上、割愛しなければならないのは、残念である。

合言葉や呪文に使われるラテン語

前述した Swan School の校長先生が指摘したように、本当に多くのラテン語やその流れを汲むフランス語が登場する。特に人の名前や合言葉や呪文

によく使われている。

使用されているラテン語のそれぞれの意味を詳しく知りたい方は、Belton 氏のシリーズ『「ハリー・ポッター」が英語で楽しく読める本』を是非参照してほしい。

ここでは、ラテン語、フランス語、ギリシャ語などと関連している例を多少取り上げて、Belton 氏の解説や寺島久美子氏の『ハリー・ポッター大事典Ⅱ』やラテン語辞典（水谷智洋『羅和辞典』）などを参考にして解説を試みたい。第2巻以降は、そこに出てくる呪文を拾い上げてみたが、ここでは列挙するだけに留めたい。どれだけのラテン語系の言葉が使用されているかを知る上では、それも重要かもしれない。

1) 人や物の名前など

Draco Malfoy : Harry と同じ学年の宿敵。名前の Draco はラテン語の「竜、蛇」を意味し、苗字の Malfoy は、mal- という語頭からも想像できる（例えば、malady「悪疫」、malcontent「反抗的な」など）ように、あまり良い意味ではない。Belton 氏 (Belton² p. 75) は、フランス語の mal foi（「背信」）から作られたのではないかと考えている。

Severus Snape : Harry の父親 James の宿敵。名前の Severus はラテン語でそのまま「厳しい」の意味であり、英語の severe の語源である。Harry には手厳しいというより、あからさまにいじめていて、読者の誰もが嫌うように設定された人物。最後の第7巻で、Snape が Harry の母親への密かな愛情を Voldemort に殺されるまで生涯貫いたことが Harry にもわかる。第7巻の最後で、Harry が自分の子供、次男にこの Snape の名前 Severus をつけたことを読者は知ることになる。

一方、姓の Snape はイギリスでは実在の名前で、彼が最終的には悪い人間でないことを Rowling 氏はそれとなく示している。彼女は、登場する悪人には、実在する名前を使用してはいないのである。

その他に使用されている名前を少し挙げてみよう。

Argus Filch (p. 99) : Argus: the hundred eyed keeper of Io (*A Latin Dictionary*, p. 160), Filch: おそらく英語の filch 「くすねる」 から。

Eeylops Owl **Emporium** (p. 56) : emporium: a place of trade, a market-town, market (*Ibid*, p. 644)

Nimbus Two Thousand (p. 122) : nimbus: a black-rain cloud, a thunder-cloud (*Ibid*. p. 1208)

2) 合言葉: 最初に出てくる合言葉は '**Caput Draconis**' (竜頭) (p. 96)。もちろん, 'pig snout' (p. 120) のように英語の合言葉も登場する。

3) 呪文に関しては, 第1巻では Harry たちはまだ1年生なので非常に少ない数の呪文しかまだ習っていない。

Alohomora (p. 96) : 鍵のかかった扉を開けるのに, Hermione が使った呪文。

「障害物よさようなら」

Wingardium Leviosa (p. 127) : Ron が学校に侵入してきたトロールを征伐するときに使った呪文: トロールのこん棒を宙に浮かせ, 頭の上に落とす。

Locomotor Mortis (p. 162) : Hermione が Ron に教えている「動きを止める薬」

Petrificus Totalus (p. 198) : Hermione が仲間の Nevill にわざと掛けた呪文。ラテン語から派生した英語 petrify 「石にする」から意味はわかる。Totalus は total をラテン語風にしたもの。

2巻以降には, 呪文の数も多くなるが, やはりラテン語中心である。

Expelliarms (p. 142), Rictusempra (p. 143), Tarantallegra (p. 144)

Finite Incantatem (p. 144), Serpensortia (p. 145), Aparecium (p. 174)
Lumos (p. 201), Obliviate (p. 224)

3巻では、

Apparate (p. 123), Impervius (p. 133), Dissendium (p. 145),
Mobilierbus (p. 150), Expecto Patronum (p. 176), Nox (p. 248)
Ferula (p. 276), Mobilicorpus (p. 276), Confundus (p. 285)
Disapparate (p. 306)

第4巻では

Incendio (p. 46), Accio (p. 64), Sonorus (p. 93), Quietus (p. 105)
Morsmordre (p. 115), Stupefy (p. 116), Enervate (p. 120)
Prior Incantato (p. 121), Deletrius (p. 121), Deletrius (p. 121)
Imperio (p. 188), Crucio (p. 189), Engorgio (p. 189), Reducio (p. 190)
Avada Kedavra (p. 190)
Furnunculus (p. 262), Densangeo (p. 262), Orchideous (p. 270)
Avis (p. 271), Diffind (p. 297), Relashio (p. 430)

第4巻では、「闇の魔法界」で好んで使われる3つの「許されざる呪文」がすべて登場する。すなわち、『服従の呪文』の **Imperio**, 『磔の呪文』の **Crucio**, 『死の呪文』の **Avada Kedavra**。

Imperio は英語の imperil 「危険にさらす」と関係がある。

Crucio はラテン語から派生した英語 crucify 「～を磔にする」の語源。

Avada Kedavra はイギリスの子供たちには馴染みの呪文 abracadabra から作り出されたもの。

第5巻以降も多くの呪文が登場するが、上記の呪文ほど強烈ではない。第5巻、第6巻、第7巻の呪文を登場する順番に列挙してみる。

第5巻：Scoourgify, Locomotor trunk, Evanesco, Reparo, Portus,
Accio, Legilimens, Protego, Flagrate, Colloportus

第6巻：Shield Charm, Intruder Charm, Anapneo, Tergeo,
Specialis Revelio, Aguamenti Charm, Muffliato, Levicorpus,
Liberacorpus, Oppugno, Stupefy, Langlock, Sectumsempra,
Rennervate

第7巻：Confringo, Decendo, Body-Bind Curse, Expulso,
Tongue-Tying Curse, Homenum Revelio, Atmospheric Charm,
MeteoJinx Recant, Geminio, Revulsion Jinx, Salvio Hexia,
Protego Totalum, Repello Muggletum, Erecto, Cave Inimicum,
Obscuro, Severing charm, Blasting Curse, Taboo,
Bedazzling Hex, Stinging Jinx, Cushioning Charm,
Caterwauling charm, Protego Horribilis, Piertotum Locomotor,
Glisseo, Duro

Belton 氏によれば、このように呪文などにたとえラテン語が使われていても、英語圏で育った人なら意味をなんとなく理解できるように工夫されているとのことである。以上の言葉はアメリカ英語版でもオリジナル版での表現を全くそのまま使用している。

内容変更

オリジナル版とアメリカ英語版で書名の他に「内容自体」がかなり変更されたところがある。

And now there were only three people left to be sorted. ‘**Turpin, Lisa,**’
became a Ravenscrow and then it was **Ron**’s turn. He was pale green now.

Harry crossed his fingers under the table and a second later the hat shouted, 'GRYFFINDOR!'

Harry clapped loudly with the rest as Ron collapsed into the chair next to him.

'Well done, Ron, excellent,' said Percy Weasley pompously across Harry as '**Zabini, Blaise**' was made a Slytherin. Professor McGonagal rolled up her scroll and took the Sorting Hat away. (p. 91. ll. 24-32)

オリジナル版では、「どの寮へ入るかがまだ決まってない新入生が、残り3人になった」ことが読者に告げられた。その3人とは、上記の引用文の中でゴシックで表記した Lisa Turpin, Ron Weasley, Blaise Zabini であり、その3人の名前が読み上げられ、それぞれ入るべき寮も告げられ、「寮分け式」は終了する。このように話は進み、オリジナル版では問題にすべきところは何かもない。ところがところが。

アメリカ英語版の大失態

オリジナル版から引用した上記の同じ部分をアメリカ英語版から引用すると以下のようになっている。

And now there were only three people left to be sorted. "**Thomas, Dean,**" a Black boy even taller than Ron, joined Harry at the Gryffindor table. "**Turpin, Lisa,**" became a Ravenclaw and then it was **Ron's** turn. He was pale green now. Harry crossed his fingers under the table and a second later the hat shouted, "GRYFFINDOR!"

Harry clapped loudly with the rest as Ron collapsed into the chair next to him.

"Well done, Ron, excellent," said Percy Weasley pompously across Harry as "**Zabini, Blaise,**" was made a Slytherin. Professor McGonagal rolled up

her scroll and took the Sorting Hat away. (p. 122. ll. 15-25)

すなわち、アメリカ英語版では、オリジナル版と同じ3人の新入生の他に Dean Thomas という名前の新入生がもう一人追加されている。そのために残りの新入生の数は合計4人のはずである。ところが、アメリカ英語版では「寮分け」が終わっていない残りの新入生の数が3人のままであるという、まったくお粗末で、初歩的なミスを犯してしまっている。

このことはインターネット上でも指摘されていたし、書物でも取り上げられている。例えば、寺澤氏は著書『英語の歴史——過去から未来への物語——』の「人種差別」に関する箇所でのこのことに以下の様に主張している (pp. 175-176)。

「さらに、ホグワーツ校の新入生たちが寮へ振り分けられる場面で、英国版とは異なり米国版では黒人の少年 (Dean Thomas) を付け加えているが、これは (やや行き過ぎた) affirmative action といえようか。なお、ディーン・トマスは英国版にも別の場所で登場するが、黒人という指定はない。」

確かに、Dean Thomas がオリジナル版で最初に登場するのは第9章の The Midnight Duel である。Ron Weasley と「サッカー大論争」をする場面 (p. 107) で、Ron と同じ寮に所属しているという以外は、Dean についての他の情報は読者には与えられていない。

このように書くと、アメリカ英語版がオリジナル版の3人に Dean Thomas を追加した印象を与えるが (最終的にはそうなのだが)、著者 Rowling 氏の公式サイト (www.jkrowling.com) によると、実際は全く逆であったことが分かる。公式サイトには、著者は「Dean Thomas というロンドンに住む黒人の男子」を初めから想定して登場させていたが、オリジナル版の編集者がその章は長すぎるとして Dean Thomas の部分を削除してしまったことが述べられている。

This was an editorial cut in the British version; my editor thought that

chapter was too long and pruned everything that he thought was surplus to requirements. When it came to the casting on the film version of ‘Philosopher’s Stone’, however I told the director, Chris, that Dean was a black Londoner.

アメリカ英語版はおそらく、たとえ魔法の社会であっても白人だけの想定を不自然として、黒人の Dean Thomas を登場させることを歓迎し、削除しなかったが、人数を合わせるところで単純なミスを犯してしまったということなのであろう。

しかし、著者は「黒人を登場させる」構想をあきらめてはいなかった。もう少し後になるが、第5巻、*Harry Potter and the Order of the Phoenix* では、ついに「黒人の魔法使い」を登場させる。

‘And this is Kingsley Shacklebolt.’ He (ここではLupin 先生のこと) indicated the tall **black** wizard, who bowed. (p. 48)

Kingsley Shacklebolt は、非常に優秀な黒人という設定で、主人公の Harry を助け、「闇の魔法使い (Dark Wizards)」を捕獲する「闇払い (Auror)」の一員として大活躍する。最終巻、第7巻の最後で Harry が Voldemort を倒し、魔法界にも平和が訪れたとき、Shacklebolt は暫定的ではあるが「魔法省の大臣」(魔法界政府の最高位) に指名されている。

... and that Kingsley Shacklebolt had been named temporary Minister for Magic ... (*Harry Potter and the Deathly Hallows*, p. 596)

さらに、もう1箇所、内容が大きく変更されたところがある。

許される (?) 変更：スポーツ文化の違い

Football の ‘Red card’ に関して、Dean Thomas と Ron が言い争っている場面である。

Down in the stands, Dean Thomas was yelling, ‘Send him off, ref! Red card!’

‘This isn’t football, Dean,’ Ron reminded him. **‘You can’t send people off in Quidditch—and what’s a red card?’**

But Hagrid was on Dean’s side.

‘They oughta change the rules. Flint coulda knocked Harry outta the air.’

オリジナル版 (p. 138. ll. 34-40)

Down in the stands, Dean Thomas was yelling, “Send him off, ref! Red card!”

“What are you talking about, Dean?” said Ron.

“Red card!” said Dean furiously. “In soccer you get shown the red card and you’re out of the game!”

“But this isn’t soccer, Dean,” Ron reminded him.

Hagrid, however, was on Dean’s side.

“They oughta change the rules. Flint coulda knocked Harry outta the air.”

アメリカ英語版 (p. 188. ll. 15-21)

ゴシックで表記した部分を比較してみれば分かることだが、アメリカ英語版ではオリジナル版に3行が追加され、オリジナル版から1行削除されている。イギリス英語では football である「サッカー」はアメリカ人にはそれほど馴染みがない。そのためにアメリカ人の読者には Red card が「退場」を意味することをわざわざ説明しなければならなくなったと考えられる。

問 題 点

Hagrid のなまりのある英語はアメリカ英語版でもそのまま表記されていることは前に述べたが、果たしてそのままでよいのだろうかと思われるところもある。

Got summat fer yeh here. (p.40)

下線が引かれた *summat* は ‘something or somewhat’ を意味するイギリス英語の方言 (*The Oxford English Dictionary*, Vol. X. p. 140) であるわけだが、アメリカ英語版でも直されず、そのまま *summat* が使用されているのは不思議である。イギリス英語で俗語の *nobble* (p. 135) は、アメリカ英語版 (p. 184) では、*clobber* に置き換えられているにもかかわらずである。

次の文を検討してみよう。

Perhaps people have been celebrating **Bonfire Night** early – it’s not until next week, folks!

オリジナル版 (pp. 10-11)

アメリカ英語版 (p. 6)

ここでの *Bonfire Night* は、1605年、議事堂爆破という歴史的な大事件を計画した責任者、Guy Fawkes と関係したイギリス独特の表現にもかかわらず、何の説明も何の変更も無く、オリジナル版をそのままに写しただけである。

爆破事件自体は未遂に終わり、Guy Fawkes は逮捕後、処刑された。しかし、爆破実行予定日であった11月5日は、イングランドでは *Guy Fawkes Day* とか *Guy Fawkes Night* とか、あるいは単に、*Bonfire Night* とか呼ばれて、彼に似せて作った人形や家にある可燃物を校庭や公園に持ち寄って、焼

却する日のことである。太陽があまり顔を出さなくなるイングランドの11月。急に冷え込んでくる夜に、大きな篝火を焚くことは楽しみにされていた。しかし、火事への危険性やダイオキシンの発生などを考慮して、最近では、花火を打ち上げるだけに切り替えたようである。

本題に戻ると、この語句こそ適切なものに置き換えるか、何らかの説明が必要ではなかっただろうか。

次の文に移ろう。

They ate in the zoo restaurant and when Dudley had a tantrum because his knickerbockers glory wasn't big enough, Uncle Vernon bought him another one and Harry was allowed to finish the first.

オリジナル版 (pp. 24-25)

They ate in the zoo restaurant and when Dudley had a tantrum because his knickerbockers glory didn't have enough ice cream on top, Uncle Vernon bought him another one and Harry was allowed to finish the first.

アメリカ英語版 (p. 26)

下線部の変更はアメリカ人に馴染みの薄い 'knickerbockers glory' (すでに述べた) をそのまま使用したため、後の箇所を変更しなければならなくなっただけである。

この論文の最初のところで取り上げた記事 "Harry Potter, Minus a Certain Flavour" の作者 Gleick 氏は、次のように主張している。

Are any books immune from this kind of devolution from English to "American" English? Would we sit back and let publishers rewrite Charles Dickens or Shakespeare?

Gleick 氏の主張したい意図は十分に理解できる。しかし、過去において、書き直したものは本当に存在しなかったのだろうか。例えば、Charles Lamb は Shakespeare の作品を子供向けに書き直したはずである。

ここで参考にできるのが、論文「英・米出版物の原本と異本」(大谷泰照)である。その論文には、「John Galsworthy, Thomas Hardy, James Joyce, D. H. Lawrence, Somerset Maugham などの作品は、米国版においても、そのための特別な本文の改訂や修正が行われることは非常にまれで、原文にごく忠実に翻刻されるのが通例である。綴り字を米国式に改めることすら慎むのが一般的である」ということが述べられている。

ただ、大谷氏は逆のケースが存在していたことも指摘している。すなわち、アメリカ文学作品をイギリス英語に書き直して出版しているケースである。大谷氏は Pearl Buck の *The Good Earth* のイギリス版 (Methuen 出版) をオリジナルと比較し、その異同に関して、直接、著者の Pearl Buck に書簡を送り、次のような返信 (1967年4月11日付け) を受け取っている。

I did not realize there was such a difference between the John Day text of my books, which is the original text, and the Methuen text. These revisions are probably based on the national pride, as you suggest. At any rate, they were made without my agreement.

お わ り に

Pearl Buck の言う、‘the national pride’ でオリジナルを改変されたとしたら問題である。この点は、Gleick 氏も同じで、他の国の文化も自国の文化と同じだと思いがちだが、何でも自国のものに置き換えることへの大きな危険を指摘した次の文章で氏の記事を締めくくっている。

By protecting our children from an occasional misunderstanding or trip to the dictionary, we are pretending that other cultures are, or should be, the

same as ours. By insisting that everything be Americanized, we dumb down our society rather than enrich it.

イギリス英語とアメリカ英語で英語自体の違いは存在するし、互いに置き換えが必要な場合もあるだろう。アメリカの子供たちには、馴染みのあるアメリカ英語に直されることで、理解は格段と容易になる。しかし、その反面、オリジナルが持つ独特の世界を体験できる機会を取りあげてしまっているのではないだろうか。1500年の歴史の中で培われてきた文化を根底に持つこのような作品をまだ歴史の香りさえまったく漂っていないアメリカ風に置き換えてみても逆に失っているものの方が遥かに多いような気がしてならない。もし Swan School の校長先生がアメリカ英語版を読んだら果たして何というだろうか。きっと一言、‘Rubbish.’。

これまで検討してきたいろいろな面から考察して、アメリカ英語版は満を持して出版されるべきだった。

しかし、このアメリカ英語版も一つだけ大きな貢献をしている。それはこのような非難を覚悟で(?)、イギリス英語を最新のアメリカ英語に置き換えたものをあえて出版したことである。この出版により、両者の英語を比較できる機会を我々に与えてくれたという意味で、アメリカの出版社、Scholastic には心から感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- Belton, C.,¹ (渡辺順子 訳) 2008. *Harry Potter and Mysterious Britain* (『ハリー・ポッターと不思議の国イギリス』) コスモピア, 東京
- _____ ² 2008. 『「ハリー・ポッター」 Vol.1 が英語で楽しく読める本』 コスモピア, 東京
- _____ ³ 2008. 『「ハリー・ポッター」 Vol.2 が英語で楽しく読める本』 コスモピア, 東京
- _____ ⁴ 2007. 『「ハリー・ポッター」 Vol.7 が英語で楽しく読める本』 コスモピア, 東京

- _____ ⁵ 2006. 『「ハリー・ポッター」 Vol. 6 が英語で楽しく読める本』 コスモピア, 東京
- _____ ⁶ 2004. 『「ハリー・ポッター」 Vol. 5 が英語で楽しく読める本』 コスモピア, 東京
- _____ ⁷ 2004. 『「ハリー・ポッター」 Vol. 4 が英語で楽しく読める本』 コスモピア, 東京
- _____ ⁸ 2004. 『「ハリー・ポッター」 Vol. 3 が英語で楽しく読める本』 コスモピア, 東京
- Bonnefoy, Y. (金光仁三郎 主幹, 安藤俊次 他 共訳) 2001. 『世界神話大事典』 大修館書店 東京
- Cheetham, D. (小林章夫 訳) 2005. 『成長するハリー・ポッター——日本語ではわからない秘密——』 洋泉社 東京
- Conbeil, Jean-Claude & Archambault, Ariane (Ed.) 2004. *The New Visual Dictionary*. 『大図典』 小学館 東京
- 藤井健三 2007. 『アメリカの英語——語法と発音——』 南雲堂 東京
- Grant, M & Hazel, J. (西田 実 主幹, 入江和生 他 共訳) 1999. 『ギリシャ・ローマ神話事典』 大修館書店 東京
- 本吉 侃 2006. 『英語辞典の200年 辞書とアメリカ』 南雲堂 東京
- Kachru, B. B., Kachru, Y., & Nelson, C. L., 2006. *The Handbook of World Englishes*. Blackwell Publishing Ltd., Oxford
- 加藤和光 1996. 『文化の流れから見る英語——源泉から現代のバラエティまで』 三修社 東京
- Rightly, C. (渋谷勉 訳) 1995. *The Perpetual Almanack of Folklore*. (『イギリス歳時暦』) 大修館書店, 東京
- _____ ². 1992. *The Customs and Ceremonies of Britain*. (『イギリス祭事・民俗事典』) 大修館書店, 東京
- 木村正史 1980 『英米人の姓名——由来と史的背景』 弓書房, 東京
- Kirchner, R. (前島儀一郎 その他 訳) 1983. 『アメリカ語法事典』 大修館書店, 東京
- 小西友七 1981. 『アメリカ英語の語法』 研究社 東京
- Lewis, C. T. & Short, C. 1975. *A Latin Dictionary*. The Clarendon Press, Oxford
- McCrum, R., Cran, W. & MacNeil, R. 1986. *The story of English*. Faber and Farber Limited. London.

- _____ ². (岩崎春雄 他 訳) 1989. *The Story of English*. (『英語物語』) 文藝春秋 東京
- Menchen, H. L. 1979. *The American Language*, Alfred · A · Knoff, New York
- 水谷智洋 2009. 『羅和辞典』 研究社 東京
- Murray, et all. 1970. *The Oxford English Dictionary (OED)*. The Clarendon Press. Oxford.
- 野原康弘 2007. 「ハイフン語の使用について——歴史的考察と今後の動向 その1」『英米評論』第21号 桃山学院大学総合研究所 大阪
- Nicholson, M. 1967. *A Dictionary of American-English Usage*, Oxford University Press, New York
- 大賀正喜 他 編 2008. 『プログレッシブ仏和辞典』小学館 東京
- Opie, I. & Tatem, M., (山形和美 他 訳) 1994. *A Dictionary of Superstitions*. (『英語 迷信・俗信事典』) 大修館書店, 東京
- 大谷泰照 2008. 「英・米出版物の原本と異本」『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第35号 名古屋外国語大学 名古屋
- Perkins, Derek & Joan, 2002. *American English English American*. Domino Books Ltd., Swansea
- Quirk, R. ed., 2005. *Longman Dictionary of Contemporary English*, Pearson Educational Limited, Harlow
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. 1974. *A Grammar of Contemporary English*. Longman Group Limited, London.
- Random House Webster's Unabridged Dictionary*. 2003. Random House Difference. New York.
- Random House Dictionary of the English Language*. 1979. Random House. New York.
- Rowling¹, J. K. 2007. *Harry Potter and the Deathly Hallows* Bloomsbury, London.
- _____ ². 2005. *Harry Potter and the Half-Blood Prince*, Bloomsbury, London.
- _____ ³. 2004. *Harry Potter and the Order of the Phoenix*, Bloomsbury, London.
- _____ ⁴. 2001. *Harry Potter and the Goblet of Fire*, Bloomsbury, London
- _____ ⁵. 1999. *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, Bloomsbury, London.
- _____ ⁶. 1998. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, Bloomsbury, London.
- _____ ⁷. 1997. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Bloomsbury, London
- _____ ⁸. (松岡佑子 訳) 1999. 『ハリー・ポッターと賢者の石』 静山社 東京
- _____ ⁹. 1998. *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*, Scholastic Press, New York

- _____ ¹⁰. 2007. *Harry Potter and the Deathly Hallows*. Scholastic. Inc., New York.
- _____ ¹¹. 2005. *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. Scholastic. Inc., New York.
- _____ ¹². 2003. *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. Scholastic. Inc., New York.
- _____ ¹³. 2000. *Harry Potter and the Goblet of Fire*. Scholastic. Inc., New York.
- _____ ¹⁴. 2005. *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. Scholastic. Inc., New York.
- _____ ¹⁵. 2005. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. Scholastic. Inc., New York.
- 寺澤 盾 2008. 『英語の歴史——過去から未来への物語』中央公論新社 東京
- 寺澤芳雄 1998. 『英語語源辞典』研究社 東京
- 寺島久美子 2008. 『ハリー・ポッター大事典 Ⅱ』原書房, 東京
- Terban, M. 2002. *Punctuation Power*. Scolartic Inc., New York.
- 山口美千代 2009. 『英語の改良を夢みたイギリス人たち——綴り字改革運動史 1834-1975』開拓社 東京
- Webster's Third New International Dictionary of the English Language*. 1980. G. & C. Merriam Co. New York.

The American Edition of *Harry Potter and the Philosopher's Stone*

NOHARA, Yasuhiro

The first book in the Harry Potter series, *Harry Potter and the Philosopher's Stone* was published in 1997 by the London publishing company, Bloomsbury. The story immediately fascinated British children, and its reputation spread around the world. In translation it came to be welcomed not only by children all over the world, but by adults as well.

In 1998, because of the book's world-wide popularity, an American publishing company, Scholastic revised it into American English, changed its title to *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*, and published it in the United States. Although the American edition was launched after thoroughgoing preparations lasting about a year, its reputation did not match the publisher's expectations. In an article, "Harry Potter, Minus a Certain Flavour", which appeared in *The New York Times* on 10th of July, 2000, as we can see from the article's title, newswriter Peter H. Gleick severely criticised the American edition and evoked many readers' sympathy when he intentionally used the British spelling 'Flavour' instead of the American 'Flavor'. This article also became popular on the Internet because so many Americans felt the American edition was insulting their intelligence. Besides the title change, Mr Gleick pointed out that some words in the American edition have been completely changed.

A detailed reading of the US and UK editions, comparing paragraphs, sentences, phrases and words revealed even more differences than expected. In this paper, I focus on such differences and discuss whether an Americanized edition was really needed. By way of comparison, I also refer to *The Good Earth* by Pearl Buck. The author expressed her opinion in a private letter expressing about changes made to the British edition of the book.